



新 板

梁塵愚案抄 上

伊地知文庫  
文庫20  
442  
1





杜子通典云漢有虞公善歌能令  
 梁上塵起一曰梁塵思案  
 鈔一曰名

梁塵思案鈔卷之上

神興書

庭燎



庭燎庭燎古語拾遺忌部廣曰其後素戈鳴神奉為日神行其タマキ  
 狀云于時天照太神赫怒入于天石窟イハヤ閉磐戶而幽居カクシ  
 焉余乃六合常闇晝夜不分群神愁迷手足罔措凡ウケヒユラケシ  
 致慶事燎燭而辨高皇產靈神會八十万神於天ツトヤツ八  
 湍河原議奉謝之方云又令天鈿女命以真辟葛マコトノカサヲ  
 為鬢次羅葛為手繼以竹葉タケノハ既饌木葉為手草タケノハ  
 手持著鏗之矛而於石窟戶前ツツケ而復誓言槽フネ古語宇  
 約折言奉庭燎巧作佻優相與歌舞云于時天照太  
 之意

庭燎



神中心獨謂此吾出居天下悉聞群神何由如此歌  
樂歌<sup>カテ</sup>開戸<sup>ヲ</sup>而窺<sup>ミ</sup>之爰<sup>ニ</sup>令<sup>メ</sup>天<sup>ヲ</sup>牟<sup>ル</sup>力<sup>ヲ</sup>雄<sup>ク</sup>神引<sup>リ</sup>啟<sup>シ</sup>其<sup>ノ</sup>扉<sup>ヲ</sup>遷<sup>シ</sup>  
座<sup>ニ</sup>新<sup>ニ</sup>殿<sup>ヲ</sup>則<sup>チ</sup>天<sup>ノ</sup>見<sup>テ</sup>屋<sup>ヲ</sup>命<sup>ス</sup>太<sup>ニ</sup>王<sup>ト</sup>命<sup>ス</sup>以<sup>テ</sup>日<sup>ヲ</sup>御<sup>ル</sup>網<sup>ヲ</sup>迴<sup>シ</sup>懸<sup>ク</sup>其<sup>ノ</sup>殿<sup>ノ</sup>  
令<sup>メ</sup>大<sup>ニ</sup>宮<sup>ヲ</sup>賣<sup>シ</sup>神<sup>ヲ</sup>侍<sup>シ</sup>於<sup>テ</sup>御<sup>ノ</sup>前<sup>ニ</sup>豐<sup>ニ</sup>饗<sup>ス</sup>間<sup>ニ</sup>戸<sup>ヲ</sup>命<sup>シ</sup>櫛<sup>ニ</sup>盤<sup>ヲ</sup>間<sup>ニ</sup>戸<sup>ヲ</sup>  
命<sup>シ</sup>二<sup>ノ</sup>神<sup>ヲ</sup>守<sup>ル</sup>衛<sup>ス</sup>殿<sup>ノ</sup>門<sup>ニ</sup>當<sup>テ</sup>此<sup>ノ</sup>之<sup>レ</sup>時<sup>ニ</sup>上<sup>リ</sup>夫<sup>ヲ</sup>初<sup>メ</sup>晴<sup>ク</sup>衆<sup>ヲ</sup>俱<sup>シ</sup>相<sup>シ</sup>  
見<sup>テ</sup>面<sup>ヲ</sup>朏<sup>ク</sup>明<sup>ク</sup>白<sup>ク</sup>伸<sup>テ</sup>手<sup>ヲ</sup>歌<sup>ヒ</sup>舞<sup>ヒ</sup>相<sup>シ</sup>相<sup>シ</sup>祢<sup>ト</sup>曰<sup>ク</sup>阿<sup>ト</sup>波<sup>ト</sup>禮<sup>ス</sup>  
於<sup>テ</sup>茂<sup>ク</sup>志<sup>シ</sup>呂<sup>ヲ</sup>  
古語事之甚切皆稱阿那多能志言伸手而舞  
阿那言衆而明白也今指樂事謂  
之<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>能<sup>ク</sup>志<sup>ス</sup>阿<sup>ト</sup>那<sup>ト</sup>优<sup>ク</sup>夜<sup>ク</sup>懋<sup>ク</sup>  
此意也竹葉之飲懋木名也據其介小  
神<sup>ヲ</sup>俱<sup>シ</sup>請<sup>フ</sup>日<sup>ヲ</sup>勿<sup>シ</sup>復<sup>シ</sup>還<sup>ル</sup>幸<sup>ニ</sup>仍<sup>チ</sup>帝<sup>ト</sup>罪<sup>ト</sup>過<sup>ス</sup>於<sup>テ</sup>素<sup>ク</sup>夷<sup>ク</sup>鳴<sup>ク</sup>神<sup>ヲ</sup>而<sup>シ</sup>科<sup>ト</sup>以<sup>テ</sup>  
于<sup>テ</sup>座<sup>ニ</sup>置<sup>ク</sup>戸<sup>ニ</sup>云<sup>ク</sup>云<sup>ク</sup>

愚案神樂の濫觴ハ古語拾遺に見えたり庭燎の  
と礼記も載り又毛詩の篇の名もとあり但しとよ

を雪ゆりの秋は古今集卷二十の内大秋風の弄の中  
は祢尊の秋として載ゆるを内こもひ奴のせり人のよ  
りうと庭火の曲と名付くうひゆくはふみのうら  
の木の名て天のうらとめれ祢のうらよとけりよらまき  
そのうらあうよや

阿知女作法

於<sup>テ</sup>伏<sup>キ</sup>阿<sup>ト</sup>知<sup>ト</sup>女<sup>ト</sup> 於<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>  
於<sup>テ</sup>伏<sup>キ</sup>阿<sup>ト</sup>知<sup>ト</sup>女<sup>ト</sup> 於<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>於<sup>テ</sup>

愚案阿らめの能法儀ケケアかんか一箇うとめあ  
らめとつうよや阿とうと立誓相廻るり天弼女神  
の名々のさくよとて一として他傳の女りよとけりよ  
れと今のせよあらめのかかうと名つきゆり下於て







中  
この枝にこのはえを天よまんまきとて幣のこやの枝をり  
魚葉は秋の拾遺集の祢系の前こいてらるは幣也  
とよとて幣とて大ひつめのみこととて天照太神のは  
りをかり

未  
こしてらるはあまはむとて入祢のはよとていへてを儀とてりへ  
魚葉は秋の拾遺集よのをゆりて入祢とて入祢とて  
とことて天照太神のはよとていへてとて入祢とて

枝

中  
この枝にこのはえを天よまんまきとて幣のこやの枝をり  
魚葉は枝の秋はらきこのとてらるのちそのは  
遠坂とていへてとていへてとていへてとていへて

魚葉は秋の拾遺集よあり

或説

中  
是の枝にこのはえを天よまんまきとて幣のこやの枝をり  
魚葉さうとていへてとていへてとていへてとていへて  
中よはらるは本幣とていへて  
とていへてとていへてとていへてとていへてとていへて  
魚葉は秋の拾遺集よあり

葉

中  
この枝にこのはえを天よまんまきとて幣のこやの枝をり  
魚葉とていへてとていへてとていへてとていへてとていへて  
らるは等の名に新とていへてとていへてとていへてとていへて



いづんとしてあしよのちかるといふくらしきものなりし  
雨のくぬよしてゆりし

<sup>未</sup>あしよのちかるといふくらしきものなりし  
愚素は秋の初勅撰集才九社系舞よ定家々々々々い  
へられゆりとぬ川といと節よあつ川の名なりゆり  
よきも神やよまきんすり程よるちあじよも何れ  
よりゆりんとよめり

或説

<sup>平</sup>あしよのちかるといふくらしきものなりし  
愚素よよのあしよいさぬのらと目を純よ定家と云ま  
よとよめあつりとよめりよとて宴遊とつりきぬ  
あしよよのちかるといふくらしきものなりし

<sup>味</sup>あしよのちかるといふくらしきものなりし  
愚素んよかきとつらんとあわやまねよや湯を離れ  
久しき事よいさぬのらと目を純よ定家と云ま  
よとよめあつりとよめりよとて宴遊とつりきぬ  
あしよよのちかるといふくらしきものなりし  
いづりあつちかるといふくらしきものなりし  
あしよのちかるといふくらしきものなりし  
あしよのちかるといふくらしきものなりし

弓

<sup>平</sup>あしよのちかるといふくらしきものなりし  
愚素は才九社の系舞よ定家々々々々い

愚素は才九社の系舞よ定家々々々々い



ふり一志るもなりしとてしりやうれんは志ありはうはあまうて  
のあゝありは事いふはあまらふよとよりと祢のよむ  
とさうのこも志ありいふは志も志も又梓うまう  
はぶらうのまの可きとていつくし一志るもなりしは二  
白のんどうまねていつくし伊勢お終は梓うまう  
ついでらよとて我や一むしうのこもみせよとて  
梓と柳を本うのぞ

陸奥のあまらうのまら我ひのやうやより一志のひくお  
悪業は秋の古と集とてわの秋の中田の三末と  
よりことろ安達原のまらひ本れ名とてせとらふ  
とらをうしてよとらうつゆりうひけし本末の然  
方へうわおはは方の志のん

或説

とてて〜のり〜せりまらわん心のかりまじし〜られ苦も  
悪業とて〜の禊人の女といつるよや禊人のうら  
とら人の数あり〜のこも〜とら

又

よと心のちりりよよのむ梓う禊れぬ〜はりしはうか  
悪業は秋の於遠集の祢系あふあり但集よりの  
も心の人のぬう〜よとらうと祢のんす〜よとら  
まうとあり〜とらと田方れ〜とら〜よとら  
世中の人のといり

梓うまらう〜ふと祢のよのあまら〜あつんとせ  
悪業とよのあまら〜とらとら〜



劔

向<sup>カ</sup>ひれ自費のたのむとせりてあつれれと稱るやたみそ  
愚案於是集紳樂のそと稱るのあつてとていふは  
いそれとあつや男れとらもれとていふはたかよし  
愚案於集紳も同集よありいそのこつやのたかよし  
あつとていふは男とていふは女とていふはたかよし  
とらとのこつよとていふはたかよしとていふはたかよし  
或況  
いひら<sup>カ</sup>紳はまうりはあつとらとていふはたかよし  
愚案於のこつ紳のまうりはあつとらとていふはたかよし  
とらとていふはたかよしとていふはたかよし

わ<sup>赤</sup>はたかよしとていふはたかよしとていふはたかよし  
愚案おとていふはたかよしとていふはたかよし  
とらとていふはたかよしとていふはたかよし  
いそれとあつや男れとらもれとていふはたかよし  
いそれとあつや男れとらもれとていふはたかよし

紳

この<sup>カ</sup>がこつていふはたかよしとていふはたかよし  
愚案於集紳のこつていふはたかよしとていふはたかよし  
社<sup>未</sup>のあつとていふはたかよしとていふはたかよし  
よとていふはたかよしとていふはたかよし  
愚案於集紳のあつとていふはたかよしとていふはたかよし

杖

た<sup>カ</sup>ら<sup>カ</sup>やとていふはたかよしとていふはたかよし  
とらとていふはたかよしとていふはたかよし



良業世々并に清和并とくきり山城玉大原の御あり  
於清水の名にけ歌は六帖に載りて才三句の由より  
とありひこころもむむらもあかしくとも  
實の多鳴はまくとに納涼しあそびんとまら  
こころ板井の志の里とてこころまの板井のわりの  
良業は歌々古と集りて也

片折

こころの板井やいふれ志水里とてこころ板井のわりの  
良業片折とて歌の良歌を折れまよりのてさる  
やさる板井やいふれ才三句とてこころまの板井の

諸挙

せうあやせうの世々并れどいふこととてあかしくとも折てゆん

いふや板井板井の志の里とてこころまの板井のわりの  
良業もりあけとてこころ板井のわりの  
才三句とてかこころまの板井のわりの  
良業もりあけとてこころ板井のわりの  
こころまの板井のわりの

善

いふもりあけとてこころ板井のわりの  
良業古今集よりものまの板井のわりの  
こころまの板井のわりの  
いふもりあけとてこころ板井のわりの  
良業もりあけとてこころ板井のわりの  
こころまの板井のわりの



のうらうらよしていひとゆふとふらうらうらふらふら  
とよはふ憂あつしと心ちうふまのうらうらふらふら  
愚業は飲上よらんこら

韓祚

八<sup>本</sup>んまよふかひなりかけはれう祚のうらうらふらふら  
愚業うらふゆふ修豆まこせと云ぬらちあつ本  
徳の法よけくはまこせと云ぬらちあつと云ぬらち  
を祚と云ぬらちあつと云ぬらちあつと云ぬらち  
座と云ぬらちあつと云ぬらちあつと云ぬらち  
祚あよひとらまをいとをれらうらうら  
八<sup>未</sup>ひうらうらよはゆらしてはれうかこのうらうらふらふら  
愚業八ひうらうら八枚の平盤之柏の葉ゆくはらうら

祚伏とらうら

或説

八<sup>本</sup>んまよふかひなりかけはれう祚のうらうらふらふら  
愚業まひの日本は風俗と云きり妖逆をうらうら  
又ゆふらゆふらと云ぬらちあつと云ぬらちあつ  
ゆふらゆふらと云ぬらちあつと云ぬらちあつ  
我らゆふらゆふらと云ぬらちあつと云ぬらちあつ  
とも祚らまらうら

八<sup>未</sup>んまよふかひなりかけはれう祚のうらうらふらふら  
愚業まての本徳にまらぬかかまらぬと集ふ大  
む目といつと云ぬらちあつと云ぬらちあつ  
いづり徳社まらぬと云ぬらちあつと云ぬらちあつ



乃わらふ也  
久新張

愚素大前張よ七首あり下れ小前よ九首ありあ  
張々一曲の名をうると勲よわりて大小とあ付  
くへりゆいといふ事なりゆいハ大あ張せその中  
のあ張らば曲よてあつとて洞子よて十六さか  
かうらふよとりて又呂律かよのらうひりあうすよ  
アして大あ張小あ張とあ付らうよやひんよとさ  
僻素あし可笑之れ野曲の人よとあうぬらう

宮人

本  
味  
や人のおほいそあらうとひささう  
ひささういかりゆさのうらうとよよわかうとあらうと

古語拾遺曰磯城瑞垣朝漸畏神威同殿不安故更  
令齊部氏率石凝姥神靈天目一神靈二氏更鑄  
鏡造劔以爲護御金是今踐祚天之日所獻神  
金劔鏡也仍就於倭笠縫邑殊立磯城神籙奉  
遷天照太神及草薙劔令皇女豊鍬入姬命奉  
享其遷祭之夕宮人皆參終夜宴樂歎曰羨夜比  
登能於保与須我良余伊佐登保志由伎能与呂志  
茂於保与須我良余今俗歎曰羨夜比止乃於保  
与曾許侶茂比佐止保志由伎乃与保志茂於保与  
曾許侶茂也詞之轉

愚素大前人の歎ハ宗祚天皇の所字小天照太神  
大和玉笠縫の村よ遷しとありし時宮小てま



きつろき入飛ぬみことまふ人ごもは流波をぬきおけり  
ようよひゆり奇し古終於違ふ載るるやれ河世後よ用  
ゆむ鴉今乃鴉りまよひといりおぬまごうをわがよ  
そと衣とこひひとさかりいひさこりさうさういづつ  
せし立もおぬと波のんをわがよとわいのんといひさ  
りハ膝より下まて衣のふけあうさうさうゆさの  
うりしをさるるのぬよまういふといふと神あ  
曲よまはしそとわまよまうくらうさうさうと能さの  
うりしをさるる河相違わりのさのうりしをさるる  
ていりしをさるるえんよやゆさのゆまよと思ふ  
さうさうのうりしをさるるえんよやゆさるる

本傳志更

<sup>本</sup>ゆりての神のいさむ田乃つゆのかれ

<sup>未</sup>悪業たさるる田の名をうりし

<sup>未</sup>いづのかれゆりかよちゆいゆいゆいゆい

<sup>未</sup>悪業もろかひいゆのかろおろいんや

難波写

<sup>本</sup>かよしうこまかろららわんあうららう

<sup>赤</sup>あまらうとぬまのいさゆまららあひい

悪業けなまら古今集よ入一その秋は田菘といひ

むとそあまな衣といひつりぬよらう衣の衣をまじり

お張

<sup>本</sup>さいらりよららとそいそめぬまゆい

<sup>未</sup>ありゆせしうららひいゆいゆいゆいゆい



悪業は秋の拾遺集祓系秋こそいふりハ初秋こそい  
くかこあを初と云ふくもつハ秋ハ初葉集イ  
ららしつと云ふ秋系ハ秋の字とらつとハ心又秋  
ともしつと云ふらうりハ秋のむとせしつと

階カ也ト

<sup>本</sup>志あうとらとやわかの後よあひそつと秋のつらとま  
くをのちもくれとあか

悪業志あうとらとわかのと昔あハハ作りたまうと  
らりつとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
とりとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
しとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
のあらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと

志あうとらとやわつとらとらとらとらとらとらとらとらと  
はよまうとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
くつとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと

<sup>末</sup>とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
やわつとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと

悪業志あうとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと

井ナ系野

<sup>本</sup>志あうとらとやわかの後よあひそつと秋のつらとま  
くをのちもくれとあか

悪業志あうとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと  
とらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらと







よらしてをけりて奥うとらへて色のなり  
末  
天よせんともて姫のやあらそふのあま人もとらへ  
まのりつあみぢりつらくらのあつ

五葉天よせんそと照を林のほのち  
林の贅人とつらへ

閑野

本  
まのりのこまけりぬもてんよのりやいふら  
五葉まのりのこまけりぬもてんよのりやいふら  
こまのりやいふら

末  
ありあつてまのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら  
こまのりやいふらとせんよのりやいふら

磯壽

本  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
末  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら

茶末

はらばやまのりやいふらとせんよのりやいふら  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら  
まのりやいふらとせんよのりやいふら  
五葉まのりやいふらとせんよのりやいふら



うらぶ田のいぶつらうおのやどのまはるよめはえきとて  
やうきとくさきやうきとていふきやうひなけな  
とれや

悪業はる京田の万系鉄よめいぶつさの輪とつて  
おのやのいぶつらうおのやの輪にけきとて  
しれとてあはれとていふけいおひかどけ  
およよせとていふとてとてとてとてとてとて  
あはれとていふとていふとていふとていふとて  
さけいおひかどけとていふとて

陸概

本  
うらぶ田のいぶつらうおのやどのまはるよめはえきとて  
悪業はる京田の万系鉄よめいぶつさの輪とつて

つとていぶつらうおのやどのまはるよめはえきとて  
よやえん東やうきとていふ名のとてとてとてとて  
かこのあはれとていふとていふとていふとて  
あはれとていふとていふとていふとていふとて  
悪業はる京田の万系鉄よめいぶつさの輪とつて  
やうきとていふとていふとていふとていふとて

総角

本  
あけのいぶつらうおのやどのまはるよめはえきとて  
かこのあはれとていふとていふとていふとて  
悪業はる京田の万系鉄よめいぶつさの輪とつて  
あはれとていふとていふとていふとていふとて  
あはれとていふとていふとていふとていふとて  
あはれとていふとていふとていふとていふとて

末

111

111



とらけりし目もさへもさへひさし

悪業あきせしれとてさへくはひとらねど何れとて  
とをけりてかつてまの目もさへもさへひさし

大宮

<sup>本</sup>おがもれちりてことゆりてさへおやてさへやまあつてさへ  
悪業大まの内裡とてさへくはひとらねど何れとて  
女上事とてことゆりてさへひさしとてさへひさし  
らとやれりてねむをさへさへさへさへさへさへ  
<sup>未</sup>さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ  
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

悪業まをさへさへさへさへさへさへさへさへさへ  
さへさへ

淡田

<sup>本</sup>だんがとさへさへさへさへさへさへさへさへさへ  
かへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

悪業だんがとさへさへさへさへさへさへさへさへ  
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

<sup>未</sup>やつさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ  
悪業もさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

蜚

<sup>本</sup>ひらりてさへさへさへさへさへさへさへさへさへ  
絲とゆりてさへさへさへさへさへさへさへさへさへ

悪業ひらりてさへさへさへさへさへさへさへさへ  
さへさへさへさへさへさへさへさへさへさへさへ



むしとくくんとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ  
たつとく

<sup>末</sup>

いさくちやうやとくめらへ

或説

<sup>本</sup>

まじりかやうとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ

<sup>末</sup>

とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ

たつとく  
いさくちやうやとくめらへ  
まじりかやうとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ  
たつとく

子歳

<sup>本</sup>いさくちやうやとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
<sup>末</sup>とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ

早秋

<sup>本</sup>

いさくちやうやとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ

<sup>末</sup>

とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ

たつとく  
いさくちやうやとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ  
たつとく

いさくちやうやとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ  
たつとく

いさくちやうやとくめら鉄曲の言をうくく一はのがまゝ  
とくし蟹と角あつちく木のひとくしじて角らちまゝ  
たつとく







中ありて新よとらふらん

あつりやむらりと いりやあつりと

悪業あつりとハ厭ふたの因にあつらん也

むらりとハ板のひこせしらん也

星

吉く利く

ちりりせんといふやうにちりりちりりちりり

してちりりせんといふやうにちりりちりりちりり

やちりりせんといふやうにちりりちりりちりり

とや

悪業にちりりせんといふやうに吉く利く千歳業

と云ふに吉く利くハ吉利と云ふやうにちりりちりり

ちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり

白衆等と云ふはちりりちりりちりりちりり

てちりりちりりちりりちりりちりりちりり

朝の信淨の偈と云ふはちりりちりりちりり

の晨朝と云ふはちりりちりりちりりちりり

よちりりちりりちりりちりりちりりちりり

いつつ何々有ぬの月れりてこの下れこそみか星乃

曲し

本歌の向は同一仍畧す

得後子

ちりりちりりちりりちりりちりりちりりちりり



くせふにやうしちひらひらとやうなれたわりのくせふにや  
悪業くせふにひらひら選と今の世も女友は約選や  
いふ名あつて祿やの国も志もゆふの志めゆふのしほ松  
の美あしたらちこころの事解ほしちひらひらと  
ちのちのうへに松とこころ

<sup>未</sup>こまこまにわらわらとまたゆりてら〜  
おや〜ちひらひらとまたゆりてら〜  
悪業くせふにひらひらとまたゆりてら〜

本傳作

<sup>本</sup>ゆふにわらわらとまたゆりてら〜  
悪業ゆふにわらわらとまたゆりてら〜  
糸の何と〜ひらひらとまたゆりてら〜

<sup>未</sup>わらわらとまたゆりてら〜  
あそへあそへあそへあそへ  
魚や

悪業中〜とまたゆりてら〜  
あそへあそへあそへあそへ

書目

<sup>本</sup>いふにわらわらとまたゆりてら〜  
悪業あそへあそへあそへあそへ  
あそへあそへあそへあそへ  
<sup>ホ</sup>いふにわらわらとまたゆりてら〜  
悪業拾遺集よ祿系秋我弱かやゆりてら〜  
こころの事とまたゆりてら〜  
こころの事とまたゆりてら〜



たゞと云くも多敷くも云物に新日のあつたりと  
いひてこれと考と人とかめりてふらふと  
なして日の教のあつたりといふや又新の  
よをてしつらとんていり拾遺集の八を  
日のけり去きとさすん

或説

かふことととまてしつら

ユタテ  
弓二五

いとちやあまのとのうらうらなれをかき  
良業のうら根あは六位以下の人と  
いつりまよひの申し人といふやかの  
也かけあらしめ此曲よら物と同し

みか致のちりかたり

しつらのをいそつらさたよくゆりあ

おはさこのゆきとらふのうらさつ  
良業ゆきとらふはゆき木と

とらふ木の極

良業極とらふはゆきゆきとらふ  
良業極とらふはゆきゆきとらふ

いつら

良業ゆきとらふはゆきゆきとらふ  
良業ゆきとらふはゆきゆきとらふ  
良業ゆきとらふはゆきゆきとらふ



臣棄て人神いとも神と同一おきの夜ハハ位れさぬけ  
夜ハハの毛衣と云へりよき世の命ハ對してツツリ

新巻

阿<sup>未</sup>さくくやさこのまらりとのよわくとまてし  
まるとまてしかのりそつてゆくとまてし

臣棄て天智天皇ハ割れ新倉や木の丸取よ我とれ  
を棄てつてつりさくちりそつといへり末の洞といへ  
く取まてく新倉の曲よさくちりさく新倉のまて  
知つて天皇ハ筑いよあつて奥美抄八重し  
抄よのまてし世は世と性ハあらんとさくちりす  
安よ自ら紀とけん久保くよ新倉天皇ハ時<sup>皇孫天</sup>  
の<sup>盜</sup>一日悔より言と兼とせり時言兼救の軍と我よ

ととめゆりく天智天皇つてととむさくちりさく  
いよのまよの幸として熱田津の石湯の新まよあ  
ちりゆつてそつて天智天皇らへさくちりさく  
供ちりゆつてそつて新倉橋の廣庭のまよさくち  
ゆくと新倉の社のまて切さくちりさくちりさく  
まてく新倉の神いりさくちりさくちりさく  
新よ新倉のまてつて崩しゆつり新倉れ社を延  
と新倉神と新倉よいさくちりさくちりさく  
風去れよと去れ新倉の脚よ新倉の社ありと  
んくより田玉の中るまていよのまてり去れまへ  
さつちりまてりまてりまてりまてりまてりまてり  
ゆくと古来あやちりて筑いよまてりまてりまてり



まうらむとのみえと云まうらまのよきまじくはくせむ  
 くらし天智天武といふまゝはあえとてけり時分めえ  
 よまきくいほて物念のけりてまじりけりて時この  
 へまわら百の官揚をりて居出ゆりて名のみ  
 といつゆしぬき子そと極くゆへに邯鄲は物念  
 ぬしとまじりあり神示極云物念吹返催ふ系抽  
 子式云掻逆線拾云く神示よ物念とうらふ母を  
 帯と和琴うり別よまててさいとて極子よてう  
 といふとぬきとと云といひり物念の歎といひぬあぬしと  
 延喜帝れ勅定物念るハ官を極くりよまらて  
 蘇くぬしと名つけけりつうま

或説

物念やわかれ淺くあらむとれ玉のめくふあらぬ遠はり  
 五葉葉面の浅くあらむらへりてけりて物念に  
 けりてぬきとてけりて物念にけりて物念に  
 一説はいあまれ嘆まらるとてけりて物念に  
 物念の中うけり相とけりて物念に物念に物念に  
 物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に  
 物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に  
 物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に

とて

この物念にやわかれ物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に物念に



草のくさくさうん

魚葉の相にこころを遊ばし一云釣の技は草のくさくさ  
りよらじ

成規

是もらの魚りりうとられ下をうらうらこころをくこわくこわく  
もらうらうらきものいぬ

魚葉のくさくさやわいあせもらの釣とまらくわくわく  
らくまをゆかかくこいぬあせもらくまれとくわくわく  
きれこぬい尾毛也あせもらくまらくまらくわくわく  
らくまや

竈敷歌

あそびのうたをいふとあそびをいふとくこの天のうらうらよはら

あそびのうたをいふとあそびをいふとくこのあそび

魚葉の竈敷をく魚葉のいものこ針休と網すうあそび  
よいあそびをいふとあそびをいふとくこのあそび  
あそびのいぬは遊ばくくくくくくくくくくくくくくく  
止回八百万の針のあつたりぬくくくくくくくくくくく  
かともくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
あそびのいぬは遊ばくくくくくくくくくくくくくくく

未  
久葉の天の河原よとつひをいふとあそびをいふとくこのあそび

魚葉のいぬは遊ばくくくくくくくくくくくくくくく

酒後歌

さしこのいぬは遊ばくくくくくくくくくくくくくくく  
魚葉のいぬは遊ばくくくくくくくくくくくくくくく



唐のころよりとゞくりみりし癯の字に律為よりうり也  
 祝詞とも癯の服がらふくとしてとらうと則服城  
 立へりわぐかたりその我もよしかとらとそいきうり  
 ことあらまうりまわくよと建とつげさうゆへあ  
 いぬいぬ  
 赤  
 さいふがささいかむれをむきらぬれといとそれをさいふれで  
 悪業きさいかうれとみ掃除をうけとささいせりめ  
 してきりめくもとりめを過せりや文蔵のうんうふ  
 かへしひよきさうり女のふとらうりみんしゆも  
 ものとありめくもそれとゆりめと色りよや祇田  
 けくたもの食相もつとみまぬとらささいせりめ  
 ち群女と云んやうへー

わものあつらうりゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまの目れあがなやうりゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ

悪業あまのあつらうりゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 してまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 まうきれゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 してゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ  
 ちまゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめゆめ



律之末徳の律しくみらるるに律呂はと云律は又  
 とりたり律ろととハ律の母ハ中臣の極洞よ  
 あつししよとこといふさ子かろく一律の子  
 といふ人のおこもるしととつしとつしと  
 ふととりつもろととなぬぬかりたつよちつよつ  
 かとよよのつまんも一ととと

五葉うきろの存るものなりかろくもろくとつしと  
 かりおこよハ律とわけしとつしととつしとよの  
 けりハ律の妻と我門よとつしととつしととつしと  
 とつしととつしととつしととつしととつしと

右律樂の歌ハ五葉のどよふあし欽のねこ  
 己そのより一かふふゆれおつしととつしととつしと  
 とつしと字面の美つしとつしとつしとつしと  
 す九律系ハ一越洞ととつしとつしとつしとつしと  
 系家よハえん人の曲ととつしとつしとつしとつしと  
 家ハハろとととととととととととととととととと  
 うとととととととととととととととととととととと



